

I 平城京左京の調査

1. 左京一条三坊二坪 — 木取山古墳 — の調査（第 131 — 8 次）

本調査は住宅建設にともなう事前調査である。調査地はコナベ古墳の南 140 m で、一条条間路北側溝の存在が予想された。また、調査地北の墓地の高まりを古墳の名残りとする意見があり、その確認が期待された。調査は工事申請地西端に南北トレンチを設け、周濠確認後、東端 2ヶ所のトレンチで周濠の方位を決定した。

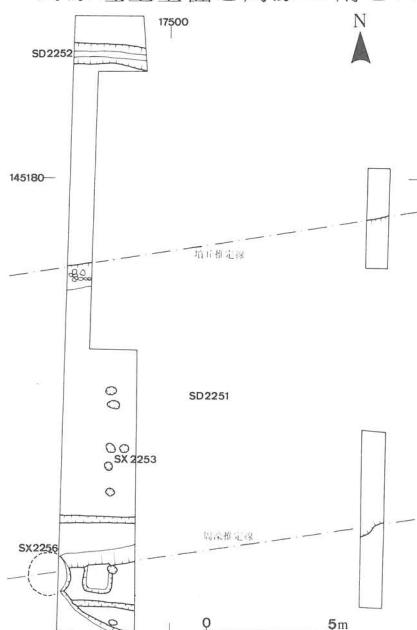
層序は、調査区北端では耕土・床土下に赤褐色粘質の地山、南端では耕土・床土下に路肩整地土があり、その下で赤褐色バラス地山を検出した。遺構には、古墳周濠、奈良時代の溝 1 条・ピット群、近世野壺 SX 2256 などがある。

古墳周濠 SD 2251 は幅 12 m、深さ 1 m で、北岸に葺石が残る。濠底に暗灰色粘質土が溜り、バラス混り赤褐色粘質土（埋土下層）・黄褐色粘質土（埋土上層）で埋め立てている。埋土下層から平城宮土器 I の土器片が出土し、平城京造営時に周濠を埋めたことがわかる。円筒・蓋形埴輪片は埋土上下層間から出土した。

周濠埋土上面と周濠の南とに、奈良時代ピット群 SX 2253 がある。ピット中から興福寺式軒瓦などが少量出土した。

一条々間路北側溝は検出されず、調査区の南にあると思われる。調査区北端で検出した東西溝 SD 2252 は、古墳削平後に掘削した幅 0.8 m、深さ 0.3 m の溝で、溝中から土師器高杯など奈良時代末期の土器が多数出土した。

周囲の地勢などから検出した古墳の全形を推定すると第 13 図のようになる。すなわち、
①調査地北の墓地の高まりは、法華寺所蔵の古図でもほぼ円形の地割を残す。これを古墳の名残りと考え、本調査成果を加味すると、主軸をほぼ南北に置く前方後円墳となる。



第12図 第 131 — 8 次調査遺構図

②本調査で検出した周濠の方位は、ウワナベ・コナベ古墳の前方部南辺の方位に近似する。

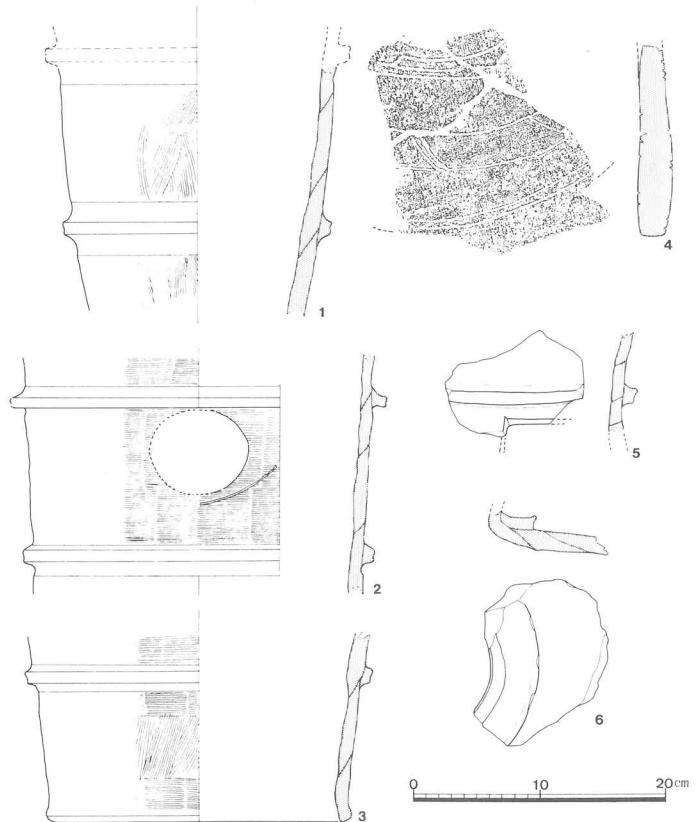
③北の高まりを後円部の名残りとすると、平城京造宮に際し、前方部は削平・整地されたが、後円部は何らかの理由で残されたことになる。とすると、法華寺所蔵の古図にも見える後円部北東の道路の彎曲や、後円部西に真北からやや西に振れた畔道は、古墳周濠の外形の名残りと考えることができる。

④以上の諸点から周濠の外形を復原すると、墳丘の形はコナベ古墳型よりもウワナベ古墳型が妥当し、全長 110 m 強の前方後円墳となる。なお、同古墳は法華寺所蔵の古図にもとづき、「木取山古墳」と命名した。

周濠出土の円筒埴輪は、有黒斑・無黒斑の両者があり、外面第2次調整は、両者ともにB種ヨコハケである。第2次調整を欠くものもあるが、5世紀初頭の所産と考えられる。



第13図 木取山古墳 墳丘復原図

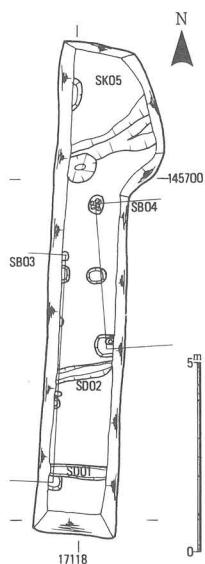


第14図 木取山古墳出土埴輪実測図

2. 左京一条三坊十六坪の調査（第 131 – 13 次）

保健衛生社の増築工事にともなう事前調査で、調査地は、左京一条三坊十六坪にあたる。調査地の層序は、客土下に旧水田の耕土・床土があり、その下位に中世の遺物を含む灰色粘質土・暗灰色砂質土・黄褐色砂質土（古墳時代の整地土）の順で黄褐色粘土（地山）にいたる。

検出遺構 検出した主な遺構は、溝 2 条、建物 2 棟、土壙 1 基である。遺構は、いずれも古墳時代の整地土（黄褐色砂質土）面で検出した。トレーナー南辺の東西溝 SD 01 は、幅 0.4 m、深さ 15 cm で、その軸線はほぼ平城京造営方位に合致し奈良時代の溝の可能性がある。SD 02 は幅 0.4 m、深さ 20 cm の東西溝で、一個体分の円筒埴輪片が出土した。埴輪円筒棺の掘形あるいは埴輪列を据えるための溝であろう。掘立柱建物 SB 03 は、南から 2 間分が 7 尺（2.1 m）等間、3 間目は 6 尺（1.8 m）である。桁間 3 間、梁間 2 間程度の小規模な南北棟建物と考えられよう。掘立柱建物 SB 04 は柱間 7 尺（2.1 m）で 2 間分を検出した。検出した柱列は梁行にあたり、東西棟建物と考えられる。SB 03 は京造営方位に対し北で東に、SB 04 は北で西に偏し、平安時代以降のものである。本調査地に北接する



第15図 第 131–13 次調査遺構図

国道 24 号線バイパス敷設にともなう調査地でも、同様な方位を持つ平安時代の小規模な建物群が検出されている。（『平城宮発掘調査報告 VI』参照）。なお、遺構図では、SB 03 は西に、SB 04 は東に建物を復原したが、それぞれ逆の方向に延びる可能性もある。SK 05 は、深さ 60 cm、上下 2 層からなり、上層の暗灰色砂質土から、巨大な割石、扁平な石とともに奈良時代初頭（平城宮土器 II）の土師器・須恵器と円筒埴輪片が、下層の暗灰粘土から 5 世紀後半の土師器の高杯・円筒埴輪片が出土した。SK 05 はウワナベ古墳の外堤から約 70 m 南にあり、また、国道 24 号線バイパス敷設にともなう調査で検出した帆立貝式の前方後円墳（平塚一号墳）とも近接しており、古墳の周濠の一部と考えられよう。小規模な調査であるため、墳形や古墳本体がどちら

にあるのかも定かでないが、埋土上層から奈良時代初頭土器が出土していることから、京造営に際して、墳丘を削平し、周濠を埋め立てたと考えられよう。

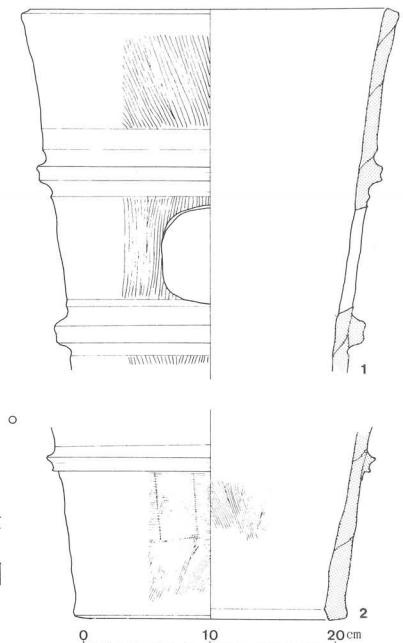
出土遺物　円筒埴輪片がSK 05・SD 02から出土した。いずれも無黒斑で、SK 05 出土例は、タテハケ調整の後、断続的なヨコハケ調整を施すものが大半を占め、SD 02 出土例は、タテハケ調整のみである。ウワナベ古墳の円筒埴輪に共通する特徴を持ち、5世紀中頃である。

まとめ　実体は不明確であるが、新たに京造営時に破壊された古墳の存在が明らかになった。バイパス調査で検出した古墳や先述の木取山古墳とともに、佐紀盾列古墳群の構成を知る上で貴重な資料といえよう。

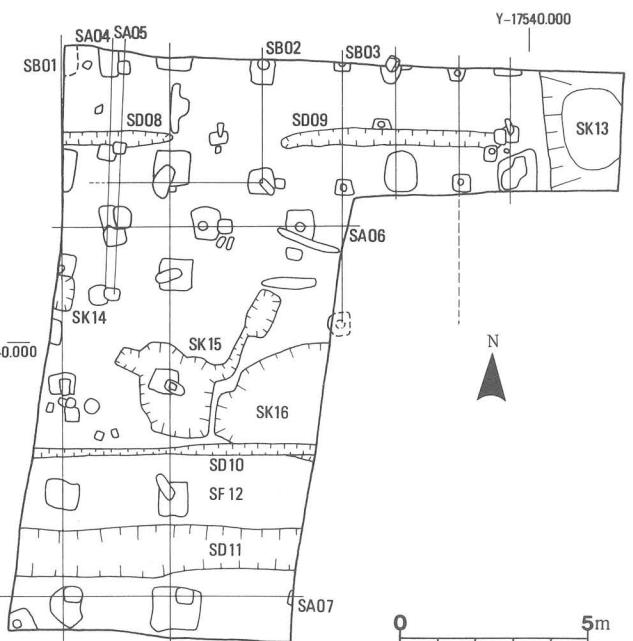
3. 左京二条二坊十三坪

の調査（第131－31次）

本調査はレストラン建設に先立つ事前調査である。調査地は、左京二条二坊十三坪の東辺部にあたり、東二坊大路西側溝および、十三坊の宅地内遺構の検出を目的とした。調査区の層位は、耕土・床土下に中世の遺物を含む砂礫層があり、その下に遺物をほとんど含まない灰色粘土が厚く堆積し、さらに奈良時代の遺物を含むバラスまじりの灰黒色粘土、地山（黄褐色粘土）と続く。厚い灰色粘土の



第16図 第131－13次出土円筒埴輪
(1.SD02出土 2.SK05出土)



第17図 第131－31次調査遺構図

堆積は、この地が奈良時代以降、中世初頭まで沼沢地であったことを示す。遺構は、一部では灰黒色粘土の上面から切り込んでいるが、大部分は地山上面で検出した。

遺構 検出した主な遺構は掘立柱建物 5 棟、掘立柱塀 4 条、素掘溝 4 条、道路状遺構 1 条、土壙 4 基である。これらは大きく 3 時期に区分できる。

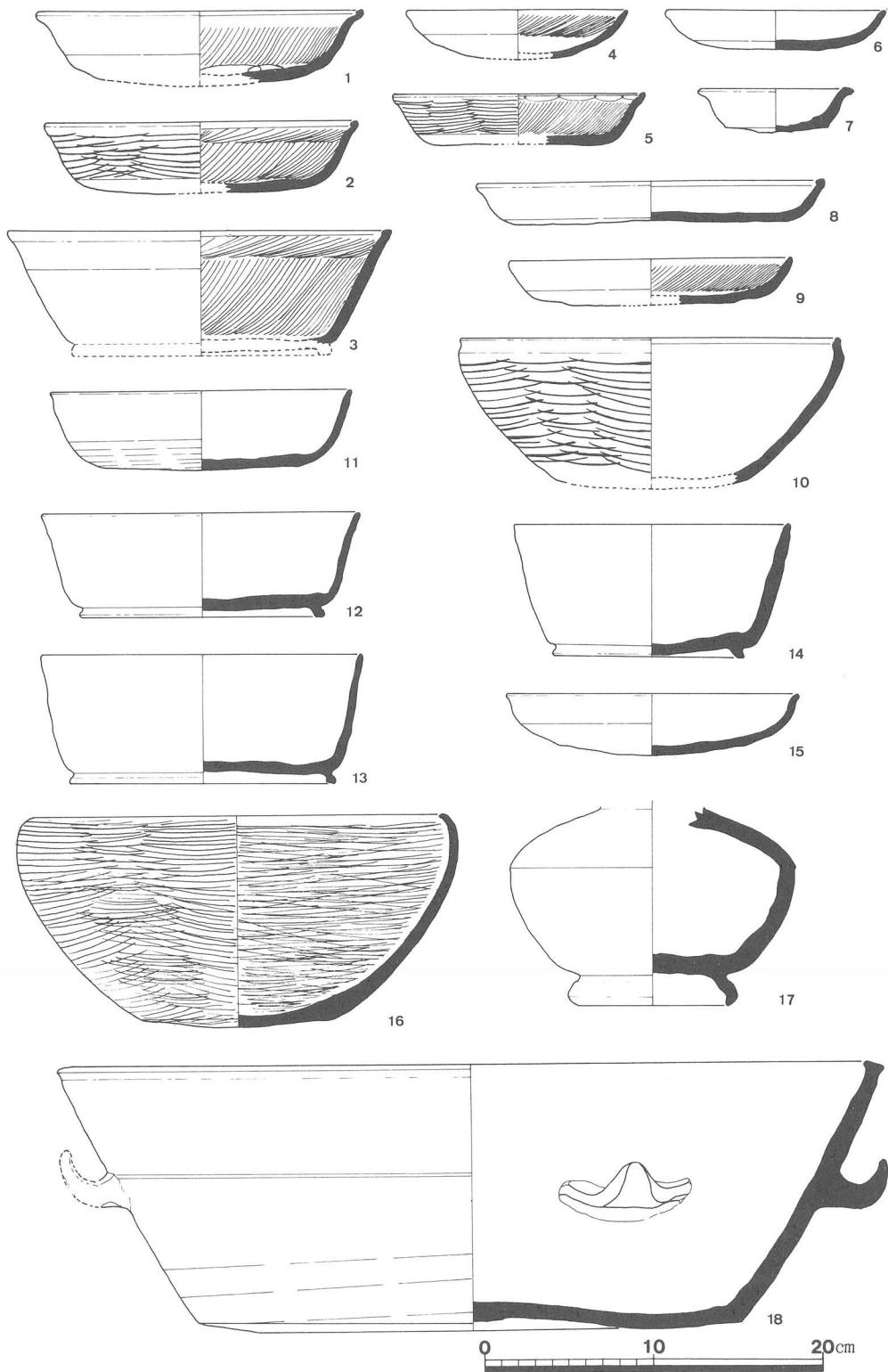
A期 東西塀 SA 06 と東西溝 SD 08・SD 09 とで南北を区画する時期である。土壙 SK 13 下層もこの時期に属する。

B期 A期の区画が廃絶し、坪内に大形の掘立柱建物が建つ。まず、掘立柱建物 SB 02 が建つが、まもなく廃絶し、東西両面庇付南北棟の SB 01 が建つ。SB 01 は桁行 5 間分を検出し、梁間 4 間、柱間 10 尺等間である。土壙 SK 13 の上層・SK 16 もこの時期に属する。

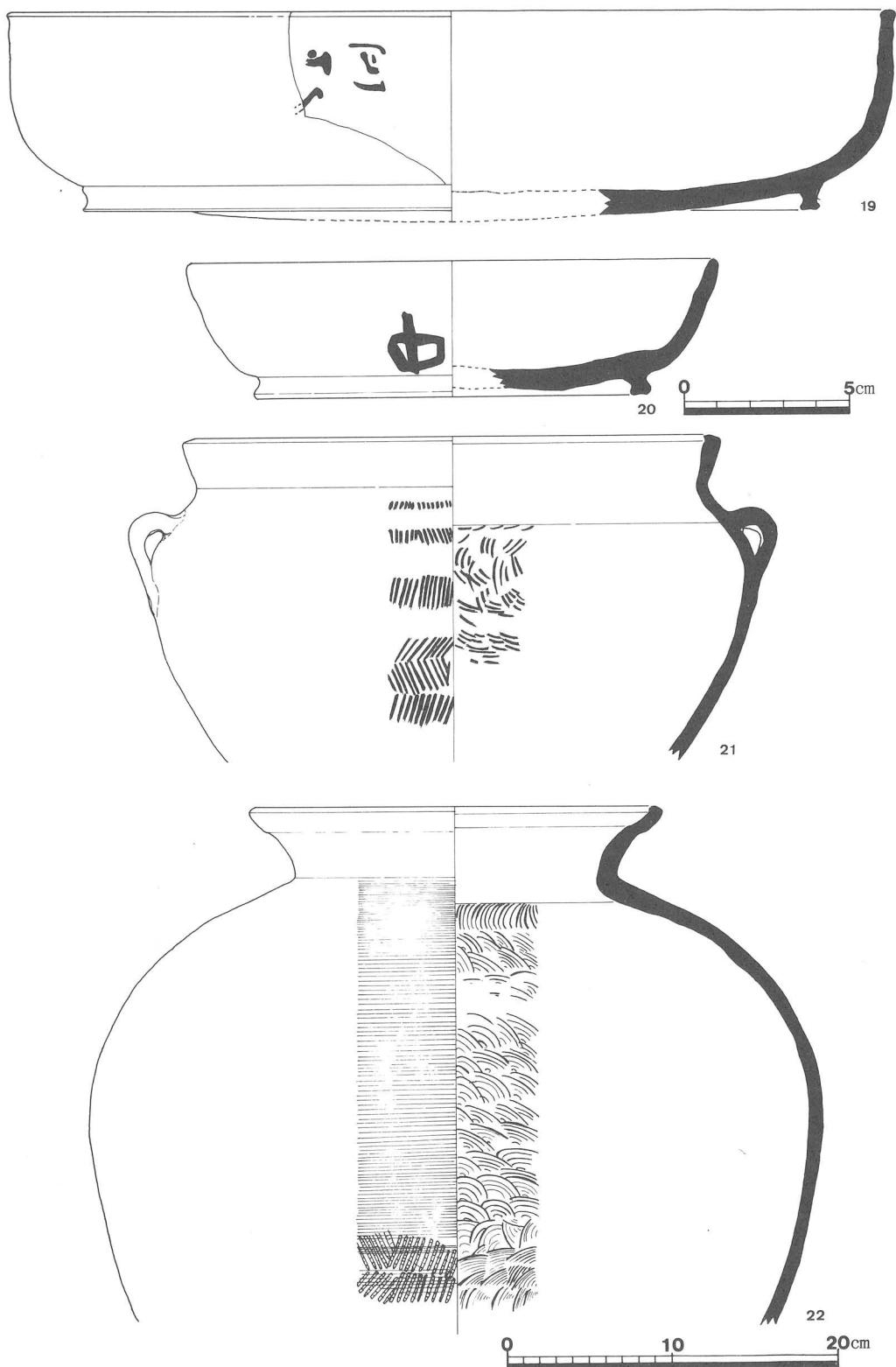
C期 東西塀 SA 07 および東西溝 SD 10・SD 11 で区画された道路状遺構 SF 12 によって、坪内を南北に大きく 2 分する時期である。この区画は、13 坪の南北 2 等分線にほぼ合致する。区画の北には、南北棟掘立柱建物 SB 03、その西に南北塀 SA 4 がある。南北塀 SA 05 は SA 04 を建て替えたものである。土壙 SK 14・SK 15 もこの時期に属する。

遺物 SK 13 下層から奈良時代初頭（平城宮土器Ⅱ）の土器が多数出土した（第18・19図）。また、SK 14・15・16 から奈良時代末期の土器が出土した。SK 13 出土品には、「中」（第19図19）と判読不能（同20）の墨書をもつもの、土師器の製作技法で作られ、須恵器に焼き上げられた皿 A（第18図15）がある。また、SK 14 から、内面に漆紙が付着した土師器碗が出土した。漆紙には墨痕がある。瓦の出土量は少ないが、SK 13 から軒丸瓦 6313 型式が 2 点、SD 11 から軒丸瓦 6308 型式が 1 点、SK 16 から緑釉平瓦の小片が出土した。

まとめ 出土遺物は大半が奈良時代のもので、A～C の各時期はすべて奈良時代に納まると思われる。東二坊大路関係の遺構は検出できなかったが、B 期に十三坪内で比較的大規模な掘立柱建物が整然と配置されていることや、C 期に坪が南北に 2 分されることなどが判明した。



第18図 第131-31次 SK13出土土器実測図 (1~5・8~10; 土師器、7・12~18; 須恵器)



第19図 第131-31次 SK13出土土器実測図

4. 左京二条四坊九坪の調査（第 131 - 16 次）

奈良市法蓮町金池でのマンション建設にともなう事前調査である。調査地は通称一条通りの関西線踏切りの東 150 m で、道路南側にあり、一条大路の南側溝と、左京二条四坊九坪の宅地内遺構が想定された。

調査区の層位は、耕土・床土下に灰褐色砂質土が全面に広がる。発掘区東南半では、その下の地山（黄褐色粘質土）上面で遺構を検出した。発掘区西北半では、灰褐色砂質土下に灰赤褐色砂質土があり、その下の古墳時代の旧河川 SD 32・SD 33 の上面で遺構を検出した。

遺構 検出した主な遺構は、掘立柱建物 10 棟・掘立柱塀 7 条・井戸 1 基・溝 2 条・土壙 8 基などである。重複関係から 4 時期以上の変遷が考えられる。

A期 素掘りの東西溝 SD 05 とこれに付属する 2 条の東西塀 SA 04・SA 06 の時期である。SD 05 の幅は東端で 2.5 m、西方で広がり 3.5 m、深さ 0.4 m である。水の流れた形跡はなく、掘削後短期間で埋め戻したと考えられる。土壙 SK 08 は SD 05 と一連のものである。

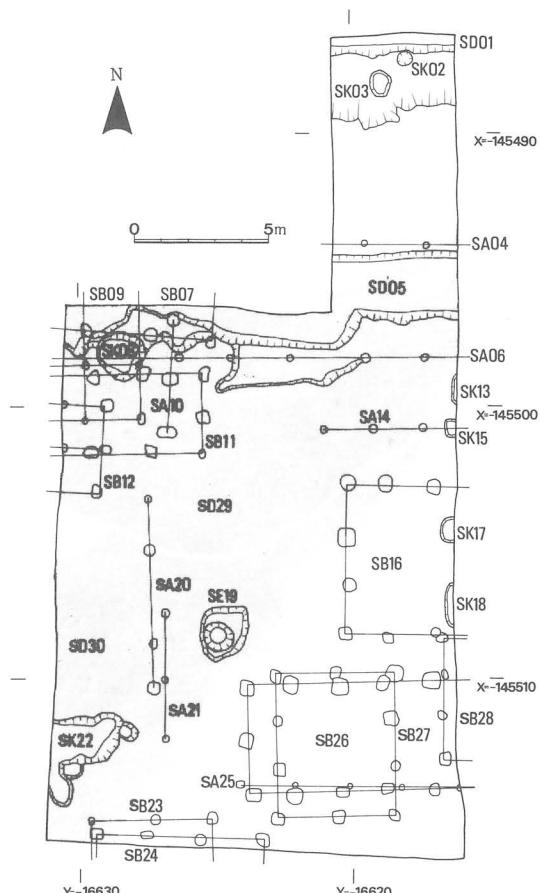
B期 一条大路南側溝 SD 01 が掘削され、九坪敷地内に掘立柱建物 SB 11・SB 23・SB 26・SB 28 と南北塀 SA 20 とが作られる。SD 01 は調査区の北端で検出したが、北肩は調査区外にあり、幅・深さとともに不明である。SB 11 は梁行 2 間・桁行 3 間以上の東西棟、SB 23 は梁行 2 間の南北棟、SB 26 は桁行 3 間、梁行 2 間の南北棟、SB 28 は桁行 3 間の南北棟になる。SB 11 の東妻柱筋は SB 23 の東側柱筋に一致し、SB 23 の北妻柱筋と SB 26 の南妻柱筋とが一致する。南北塀 SA 20 は、SB 11 の南側柱列東第 2 柱と SB 23 の北妻柱とを結ぶ線上に載る。

C期 SD 01 は存続し、掘立柱建物 SB 09・SB 16・SB 24・SB 27 と東西塀 SA 14・南北塀 SA 21・井戸 SE 19 とが作られる。SB 09 は総柱建物、SB 16 は梁行 3 間、桁行 3 間以上の東西棟、SB 24 は建物の北側部分、SB 27 は桁行 5 間以上・梁行 2 間の東西棟になる。SE 19 は径約 2 m、深さ 1.2 m の円形掘形内に設けた縦板組の井戸で、中央やや西に底板をぬいた曲物（直径 56 cm・高さ 47 cm）を据えている。

D期 SD 01は存続し、掘立柱建物SB 07・SB 12、南北塀SA 10、東西塀SA 25、土壙SK 13・SK15・SK 17・SK 18とが作られる。

以上の各時期は、出土遺物から、A期が平城京造営前の7世紀～8世紀初頭、B期が8世紀前葉、C期が8世紀中葉、D期がそれ以降と推定できる。なお、SD 01の出土遺物は平安時代に下るが、平城京造営時に掘削されたと考えられる。

遺 物 出土遺物には土器と瓦がある。土器（第21図）では、SD 05・SK08出土の土師器・須恵器（9～14）が平城宮土器I～IIの良好な一括資料である。SK 08からは製塙土器（15）も出土した。SE 19の掘形から平城宮土器II～IIIの土師器片、底の礫土から同III～IVの土師器甕（7・8）、井戸枠内から青海波当板痕のある土師器甕片が出土した。また、SA 10南端の柱掘形から9～10世紀の灰



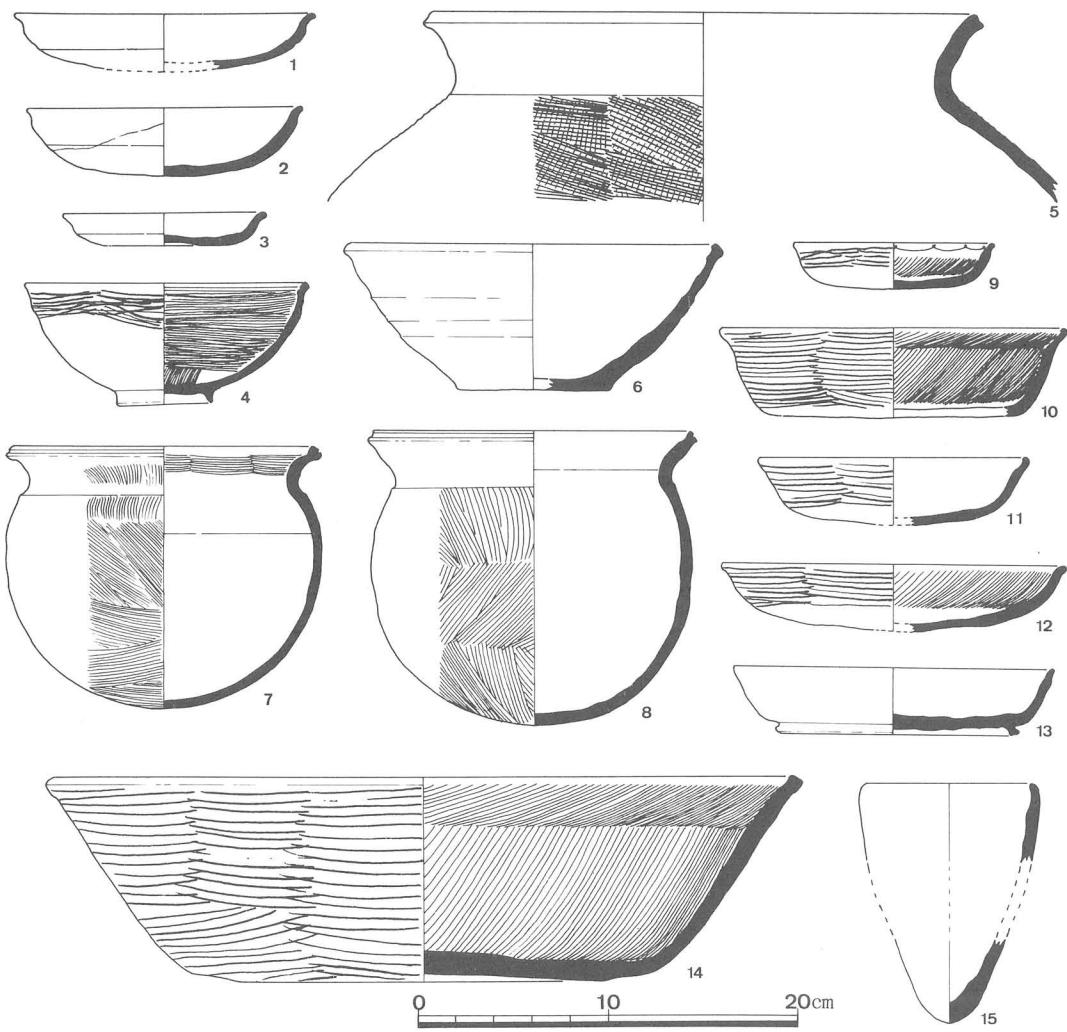
第20図 第131-16次調査遺構図

釉陶器、SK 15・SK 18・SK 19から瓦器、SD 01から12世紀前半の東播磨系須恵器甕（5）こね鉢（6）瓦器椀（4）土師小皿（1～3）が出土した。瓦は少なく軒瓦は平安時代初頭の軒丸瓦1点、時期不明の軒平瓦1点のみである。

ま と め 本調査で検出した一条大路南側溝SD 01から平安末期の遺物が出土した。これは一条大路が後世まで存続したことと一致する。SD 05は京造営以前の溝で、京造営時に埋め立てて、宅地の一部に取り込んでいる。九坪の北を区画する築地は確認できなかった。

九坪内の建物は柱間が1.5～2.1m（5～7尺）、柱掘形の一辺が約0.3～0.6mときわめて小さい。建物配置

があまり整然とせず、発掘区の東南半と西北隅に片寄るのは、旧河川 SD 32南端とSD 33中央部との砂層を意図的に避けた結果であろう。九坪の南北8等分線は、本調査区のほぼ中央にあたるが、東西方向の区画施設はない。九坪と十六坪との坪境小路・九坪の南北4等分線はともに調査区外にある。したがって、本調査区で検出したB期・C期の建物群は九坪の8分の1町以上を占める邸宅の一郭をなすと考えられるが、規模からみて中心的建物でなく、雑舎であろう。



第21図 第131-16次出土土器

5. 左京三条四坊三坪の調査（第138次）

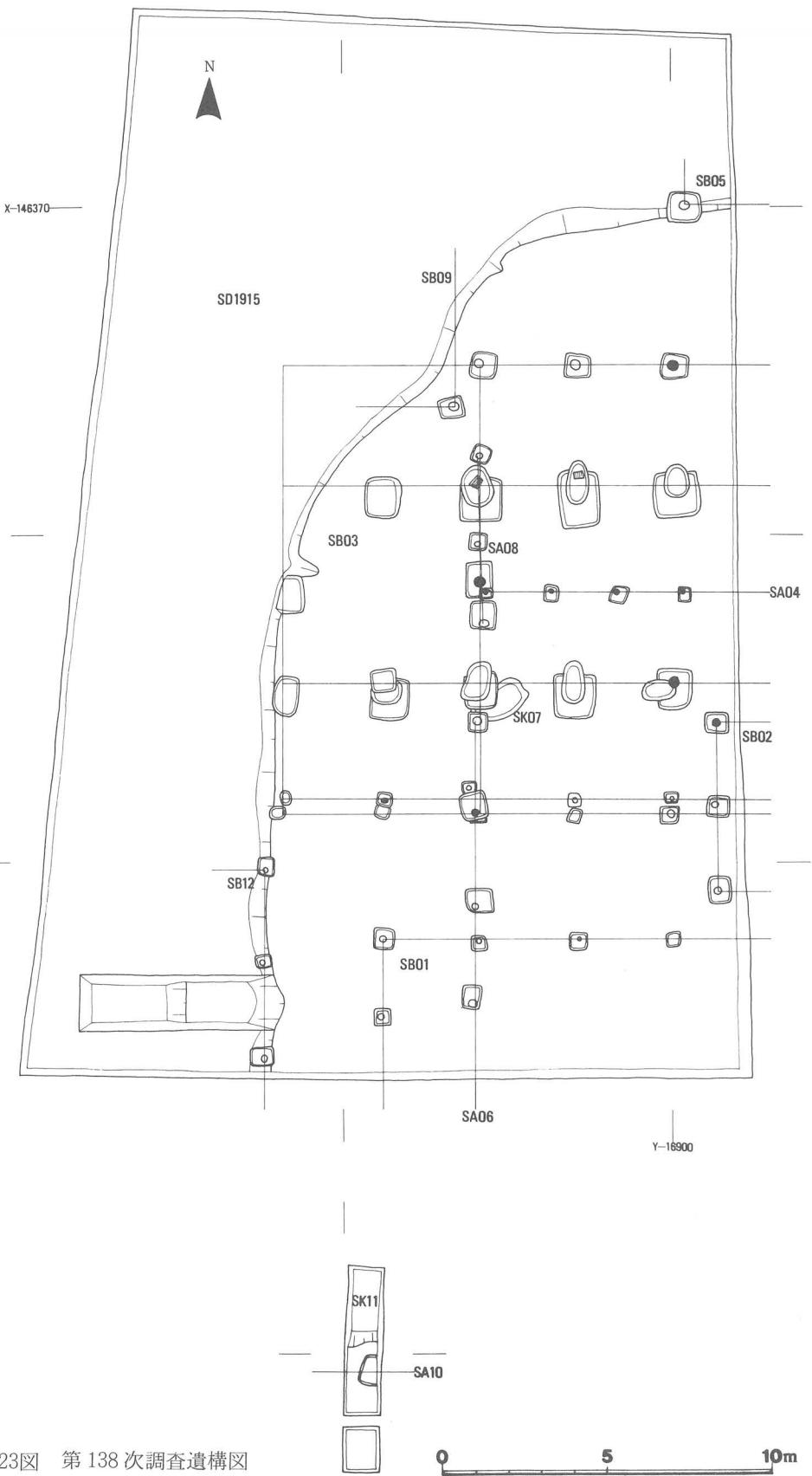
本調査はマンション建設に先立つ事前調査で、三坪内の状況、三・四坪の坪境小路の確認を目的とした。検出遺構は掘立柱建物6棟・掘立柱塀4条・土壙2基・中世河川1条である。中世河川は耕土・床土下の黄色粘土面、他の遺構はその下の青灰色粘土面で検出した。

掘立柱建物SB 01は桁行10尺等間・梁間8尺等間の東西棟。SB 02は梁間8.5尺等間の東西棟。SB 03は両面廂の東西棟で、身舎の掘形は径1mをこえ、桁行・梁間とも10尺等間で北廂は12尺、南廂は当初13尺で後に12尺に縮めている。西から2間目の建物中央の柱穴は間仕切と考えられる。東西塀SA 04は2m等間で3間分検出したが、SB 03の床束の可能性がある。SB 12は10尺等間で2間以上、SA 06は10尺等間4間以上の南北塀でSB 03より新しい。SA 08は8.5尺等間、2間の南北塀である。

SB 01とSB 03とは柱筋が一致し、SB 03が正殿、SB 01が前殿的性格をもつのである。SB 03を桁行7間とすれば、中心は三坪の東から約1/3にあたる。SB 03が広廂をもつこと、SB 03より古い土壙SK 07から奈良中頃の土器が出土したことから、奈良時代後半の建物群と考えられる。なお、南拡張区で小路北側溝は検出できなかった。SD 1951は七坪で確認した中世河川の下流である。



第22図 新大宮付近発掘調査位置一覧



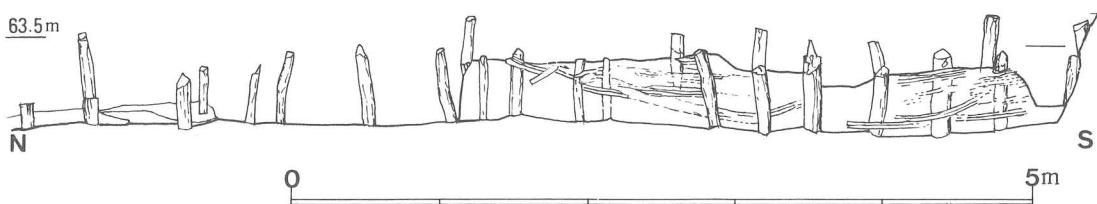
第23図 第138次調査遺構図

6. 左京三条四坊七坪の調査（第 131 – 30 次）

住宅建設にともなう事前調査である。調査地は平城京左京三条四坊七坪の西南部に相当し、東隣りは第 116 次調査、和同開珎の鋳型が出土した場所である。建物予定地の北半部は、第 116 次調査で検出した中世河川の延長にあたるので、南半部に東西 15 m、南北 15.5 m の発掘区を設けた。しかし、同調査区でも検出したのは旧河道で、奈良時代の遺構はこの河川によって大きく破壊されていた。

この中世河川の下には、縄文時代に形成された河川がある。両河川の層界凹凸の著しい不整合面であるが、縄文時代の河川堆積物は青灰色を呈し、大きな流木をふくんでいる。この流木の付近で、縄文時代後期前半の土器片が出土した。上位の砂礫層からは、磨滅した中世陶器片が出土したが、量は多くない。さきの調査では、この中世河川の岸で掘立柱建物の柱掘形を検出したが、今回の地点では浸蝕が深くおよんでおり、建物遺構は検出できなかった。

遺構として中世河川にともなう堰 1 ケ所を検出した。この堰は調査区の東南隅にあり、2 列の立杭とシガラミからなる。この堰の周囲は、粘土、砂、礫のブロックからなる乱堆積で、シガラミはそのうち青灰色粘土ブロックにあたる部分に残っていた。同じブロック土が杭の東西にまたがって堆積しているので、2 列の杭列のうち、どちらが古いのか決められなかった。河川の中央部にあたるところでは、この遺構はみあたらない。強い流れのため破壊されたのであろう。この堰は中世河川の堆積がある程度進んだ段階で設置され、杭下端が中世河川の堆積土中で止まっているものがみられた。この堰の南西では、砂礫の堆積が水平であり、東北からの乱流が、本流に直交する堰で調整されたものとみられる。



第24図 調査区東南隅で検出した堰立面図